



Title	Moulton (2004) “External arguments and gerunds” に対する短評
Author(s)	加藤, 正治
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2019, 53, p. 21-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81504
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Moulton (2004)

“External arguments and gerunds” に対する短評

加藤 正治

キーワード：動詞的動名詞／名詞的動名詞／欠陥のある vP

1.

本稿の目的は Moulton (2004) “External arguments and gerunds” (以下 Moulton (2004)) に見られる問題点のいくつかを指摘することである。Moulton (2004) は動名詞の構造に関して従来の考え方とは異なる提案をしている点で大変興味深い。提案されている動名詞の分類は動詞的動名詞と名詞的動名詞の二分法で従来と同じであるが、細部においては若干異なっている。(以下、用例は特に断りがない限り Moulton (2004) からの引用である。)

(1) 動詞的動名詞

① Clausal Gerund

I_i like [him/PRO_i singing the national anthem patriotically.]

② Poss-ing

Michael's reading *Pride and Prejudice*

(2) 名詞的動名詞

① Syntactic Nominal Gerund

Michael's reading of *Pride and Prejudice*

② Relational Gerund

Michael's reading of *Pride and Prejudice*

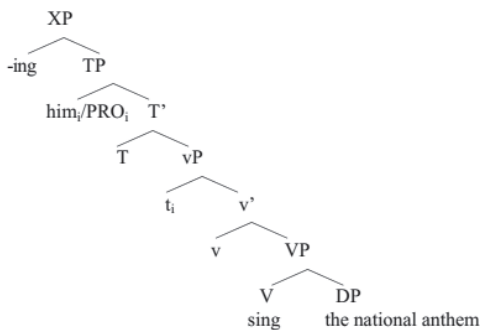
Clausal Gerund は従来の Acc-ing および PRO-ing と呼ばれるタイプである。

Poss-*ing*は従来と同じである。名詞的動名詞の2つのタイプに関しては単純な形式の場合(1)の例のように全く区別がつかないが、修飾語を付け加えると差が出て来る。

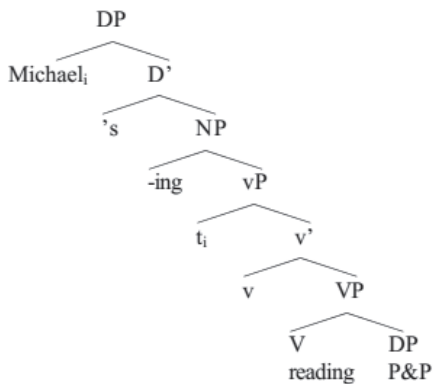
- (3) a. Maria's reading of *Pride and Prejudice* regularly. Syntactic NG
 b. Maria's regular reading of *Pride and Prejudice*. Relational NG

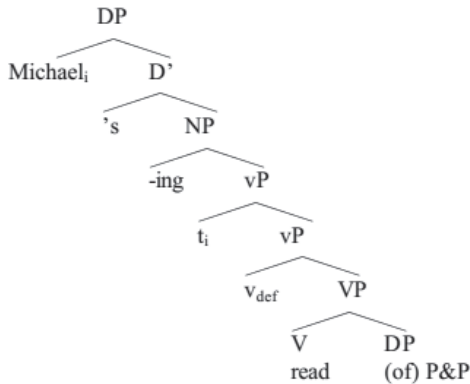
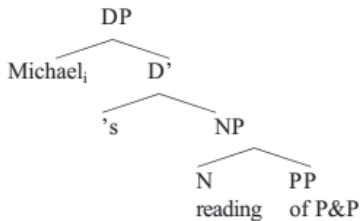
これら4つのタイプに対して Moulton (2004) が提案している構造は以下の通りである。

- (4) Clausal Gerund: I_i like [him/PRO_i singing the national anthem patriotically.]



- (5) Poss-*ing*: Michael's reading *Pride and Prejudice*

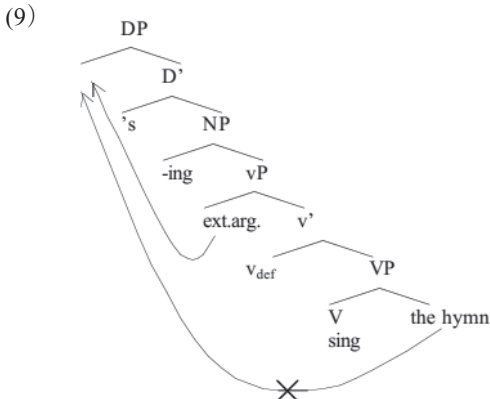


(6) Syntactic Nominal Gerund: Michael's reading of *Pride and Prejudice*(7) Relational Gerund: Michael's reading of *Pride and Prejudice*

(4)のClausal Gerundに関しては最上位の範疇が明示されていない点は別にして、範疇転換する機能を持つ-ingをTPに対して付与することによって動名詞の中でも最も「文」に近いということを表している点では従来と同じ分析である。最上位の範疇に関しては次節で述べる。(5)のPoss-ingはvPを範疇転換することによってかなりの程度の動詞性を保証している点でやはり従来と同じである。(6)のSyntactic Nominal Gerundの構造表示はMoulton (2004)の最も特徴的な主張を表している。一番のポイントはv_{def}という要素の設定である。このvはBurzioの一般化(Burzio's Generalization)に従わない欠陥のあるv (defective v)で、外項(external argument)を導入することはできるが目的語に対して対格の値を与えることができない。したがって目的語に対格が付与されずofが導入され、結果的に名詞的動名詞の形式にな

る。v_{def}によって導入された外項は内項（目的語）をDPのSpecに繰り上げ
ることを阻止するため次の例の非文法性が説明される。

- (8) a. *The hymn_i's singing t_i beautifully (by Mary) Syntactic NG
 b. *The dog_i's beating t_i cruelly (by its owner) Syntactic NG



また、(欠陥のある v ではあるが) vP を構成するので動詞句副詞 (VP
adverb) を内部に收容する可能性が出てくるが、この可能性は上記の (3a)
によって裏付けられる。すなわち、副詞によって修飾される名詞的動名詞が
存在することを正しく予測していることになる。さらに、vP を範疇転換す
ることにより Poss-ing とほぼ同じ構造になっている点も特徴的である。
Moulton (2004) ではもう一つの名詞的動名詞である Relational Gerund を語彙
的な要素として分析しているので、統語的に生成される動名詞はすべて TP
か (v_{def} を含めた) vP を範疇転換したものであるということになる。TP も vP もと
ともに動詞がとる項をすべて統語構造に写像したものとみなすことができるの
で、統語的に範疇転換する -ing は「動詞がとる項をすべて統語構造に写像し
たもの」を選択すると一般化することができる。(7) の Relational Gerund は
すでに述べたように語彙的な要素で、辞書 (lexicon) の中で範疇転換を行う
-ing により生成される。すなわち通常の派生名詞を形成するのと全く同じ方

法で形成される。ただしこの場合の語彙的な -ing は非常に生産性が強く (ほぼ) すべての動詞と結合できるためその使用には制限がある。すでに派生名詞が存在する場合には Relational Gerund は形成されないという制限である。

- (10) a. The destruction of the city...
 b. ??The destroying of the city...
 c. The promotion of the interns...
 d. ??The promoting of the interns...

以上が Moulton (2004) の提案の要約である。名詞的動名詞を統語的なものと語彙的なものに分類し、前者に関しては v_{def} を導入することにより名詞的動名詞の特徴のいくつかを説明し、後者に関しては派生名詞と同等とみなしているが、これらの点は着眼点が独特で大変興味深い。次節では少々気になった箇所について述べる。

2.

2. 1

最初に気になった箇所は (4) の Clausal Gerund の最上位にある XP である。果たしてこれはどのような範疇なのか。Moulton (2004) では明示されていないが、個人的には DP と考えて不都合はないと思う。Poss-ing の場合とは異なりこの DP は範疇転換によって形成されたものであるので -ing と TP だけによって構成されている。したがって通常の DP とは違って Spec 位置を持つことはないと考えられるため、次にあるように内部からの要素の抜き出しに関して Poss-ing とは異なった振る舞いをする事が説明できる。

- (11) a. Which city do you remember him describing?
 b. *Which city do you remember his describing? (Portner 1992)

(4)に関して大きな問題と考えられる点は動名詞の主語の格に関する問題である。動名詞の主語である *him* に対しては通常であれば何らかの方法で格が与えられているはずである。従来の方法では主節の *vP* が対格の値を与えることになるが、動名詞句内部の操作である可能性もあるかも知れない。いずれにせよ *him* は格を持つことになるが、そうなると同じ位置に生じている *PRO* も格を持つことになる。このことは「*PRO* は格を持たない」という従来の考え方に反することになる。極小主義 (Minimalism) の考え方では *PRO* も格を持つということも主張されているが、その格はここで *him* に与えられる格とは明らかに別物である。さもなければ (12) は文法的な文になるはずだからである。

(12) *[Everybody to see] is [everybody to believe]

(cf. [PRO to see] is [PRO to believe])

いずれにせよ、*him* と *PRO* を同一位置に生じさせることは格に関してある種のジレンマを生じさせることになる。一つの解決案は、「*PRO* は格を持たない」ということを保持しつつ、この場合の *him* は不履行格 (default case) が与えられる環境に生じていると考えることである。英語の場合 *It's me.* や *Me too.* の *me* から分かるように不履行格は対格であるとされているので *him* という形式はその条件を満たしている。ただし、不履行格という考えは強力な操作で、要するに「本来ならば格を与えられなければならない名詞句に格が与えられないので非文法的になるはずのところを不履行格によって救済する」ということであろうから、ご都合主義的であるという印象を免れ得ない。個人的にはもっと研究が進んでから採用すべきものではないかと思われる。

2. 2

Moulton (2004) では (5) の *D* 位置に属格の *D* ('*s* として表されている) ではなく冠詞の *D* (例えば *the*) が併合された場合、*vP* 内の主語の格を認可する

ものがなくなるのでその構造は排除され、従って the Michael reading *Pride and Prejudice* はもちろんのこと the reading *Pride and Prejudice* も正しく排除されると主張されている。後者の場合 vP 内の主語は PRO であると考えられるが、これが排除されるためには「PRO は格を与えられなければならない」という前提が必要である。前節 2. 1 の内容とも関連してくるが、そもそも Moulton (2004) では PRO の格については何も言及されておらず、PRO が想定される構造の処理の仕方が皆目見当がつかない。そういう意味では、語彙的な主語がない場合には PRO が存在すると安易に考えているようで、(紙面の都合もあったのだと思われるが) もう少し PRO の扱い方を明確にした上で議論した方がよいのではないかと思われる。

2. 3

(6) において v_{def} は外項 (external argument) を導入することはできるが目的語に対して対格の値を与えることができないために of が挿入されるとしているが、これも少々安易な考え方ではないかと思われる。「目的語に対して対格の値を与えることができない」→「of が挿入される」とする部分に少々飛躍があるのではないかと感じられるからである。そもそも「目的語に対して対格の値を与えることができない」ことと「of が挿入される」こととは本来的に関係がない。というのも、もし関係があるとすると、受動文において目的語は主語位置へ移動する必要がなくなり、主語位置には虚辞 (expletive) が挿入され、目的語の前に of が挿入された文が可能になってしまうからである。

(13) *There/It was killed of John in the war.

したがって、まず名詞や形容詞の (意味上の) 目的語の前に of が挿入されるシステムを明らかにし、それと同じ状況が (6) の vP 内にも生じているということを示した上で「目的語に対して対格の値を与えることができない」

→「ofが挿入される」と述べなければならない。

3.

以上Moulton(2004)に関して少々気になったところを述べてきたが、それによってこの論文の価値が大きく損なわれることはない。欠陥のあるvである v_{def} という要素の設定はよいアイデアであると思われるし、それによっていくつかの現象が説明されるので裏付けが与えられているということは事実である。また、名詞的動名詞を Syntactic Nominal Gerund と Relational Gerund に分割し後者を派生名詞とみなす考え方は斬新で一考に値する。詳しく見ればもっと多くの問題が出てくると思われるが、上で述べたように基本的に興味深いアイデアであるのでそれらの問題点が克服されてより興味深いものになることを望む。

[参考文献]

- Abney, Steven. 1987. *The English noun phrase in its sentential aspect*. Doctoral dissertation, MIT.
- Jackendoff, R. 1977. *X-bar Syntax: A Study of Phrase Structure*. Linguistic Inquiry Monograph No.2, MIT Press, Cambridge MA.
- Moulton, Keir. 2004. "External arguments and gerunds" *Toronto Working Papers in Linguistics* 22: 121-136.
- Portner, Paul Howard. 1992. *Situation theory and the semantics of propositional expressions*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts.

(文学研究科教授)

SUMMARY

A Note on Moulton (2004) “External arguments and gerunds”

Masaharu KATOH

In this paper we point out a few problems with Moulton (2004) “External arguments and gerunds” (hereafter Moulton (2004)). Moulton (2004) introduces a new classification of English gerunds.

- (1) Clausal Gerund: I_i like [him/PRO_i singing the national anthem patriotically.]

[XP -ing [TP DP [T' T [vP tDP [v' v VP]]]]]

As for Poss-*ing*, vP is changed into NP by attaching -*ing* to it.

- (2) Poss-*ing*: Michael's reading *Pride and Prejudice*

[DP DP [D 's] [NP -ing [vP tDP [v' v [vP V DP]]]]]

Syntactic Nominal Gerunds contain a defective light v (v_{def}), which introduces external arguments but does not assign accusative case.

- (3) Syntactic Nominal Gerunds: Michael's reading of *Pride and Prejudice*

[DP DP [D 's] [NP -ing [v_{def}P tDP [v_{def} v_{def} [vP V of DP]]]]]

Relational Gerunds are derived nominals, that is, they are formed in the lexicon by lexical rules.

- (4) Relational Gerunds: Michael's reading of *Pride and Prejudice*

[DP DP [D 's] [NP N of DP]]

There are a few problems with the proposal in Moulton (2004). First, in (1) *him* and PRO are located in the same position but they are assigned different cases. Second, if *the* is inserted in D instead of 's in (2), the subject becomes caseless and ungrammatical structures such as **the Michael reading Pride and Prejudice* and **the reading Pride and Prejudice* are produced. In the latter, PRO is assumed to be in the specifier of vP. In order to rule out this structure, there must be a presupposition that PRO must be case-marked. But unfortunately, there is nothing mentioned about the properties of PRO in Moulton (2004). Third, in (3) the existence of *of* before the object is ascribed to the fact that v_{def} does not assign accusative case. But these two facts are not correlated and this ascription seems to contain leap of logic.